

の検出となり、遺構の層位的な検討が十分にできなかった。ピット等遺構埋土の土色は黒褐色、灰褐色、明褐色、黄褐色に大別されるが、時期との対応関係ははっきりしない。IV層（橙色土：Hue7.5YR 7 / 6）はIII層・V層間に堆積が認められたが、面的な広がりほとんど無かった。

遺物の出土量は全体的に希薄で、表土・攪乱土、I層からの出土がほとんどを占める。II・III・IV層中からは微量の土器小片、黒曜石・安山岩製石器片が出土した。樹木の根による攪乱や土壌化の進行もあり、層位毎の遺物相の把握ができなかった。出土土器の主な時期は縄文早期～中期、弥生時代終末期、古墳時代後期であり、縄文期と考えられる土坑や弥生時代終末期・古墳時代後期の竪穴住居が確認されていることから、本来は各時期の遺構面が存在したと考えられる。緩傾斜地とはいえ、土砂の流失が顕著であったのだろう。調査地北東部斜面に設定したトレンチ（図6）では、黒褐色系のクロボクと思われる堆積（図6：②～④層）を確認した。竪穴住居埋土の最上層と類似することから、丘陵上から流出し堆積したものと思われるが、出土遺物は無く詳細は不明である。

V層以下は無遺物であったため基盤層と判断した。V層は黄橙色を呈するローム層で、斜面部下位を除き調査地ほぼ全域に堆積する。VI層（黄色土：Hue2.5YR 8 / 6）はしまりが少なく、始良丹沢火山灰（以下ATと略す）ブロックを包含する。ATブロックの包含量が齊一でないため、再堆積層の可能性もある。その下のVII層（浅黄橙色土：Hue7.5YR 8 / 4）は乳白色を呈するローム層で、名和町の門前第2遺跡（西畝地区）における試掘調査において当該層中から後期旧石器が確認されているが、本遺跡での出土はない。VII層より下位のVIII層（橙色土：Hue7.5YR 6 / 8）・IX層（橙色土：Hue7.5YR 8 / 6）もローム層で、丘陵斜面部下位で確認した。IX層は小礫が混じる。その下はいわゆる御来屋礫層で、固く凝結している。約10万年前の河川堆積層と考えられている。

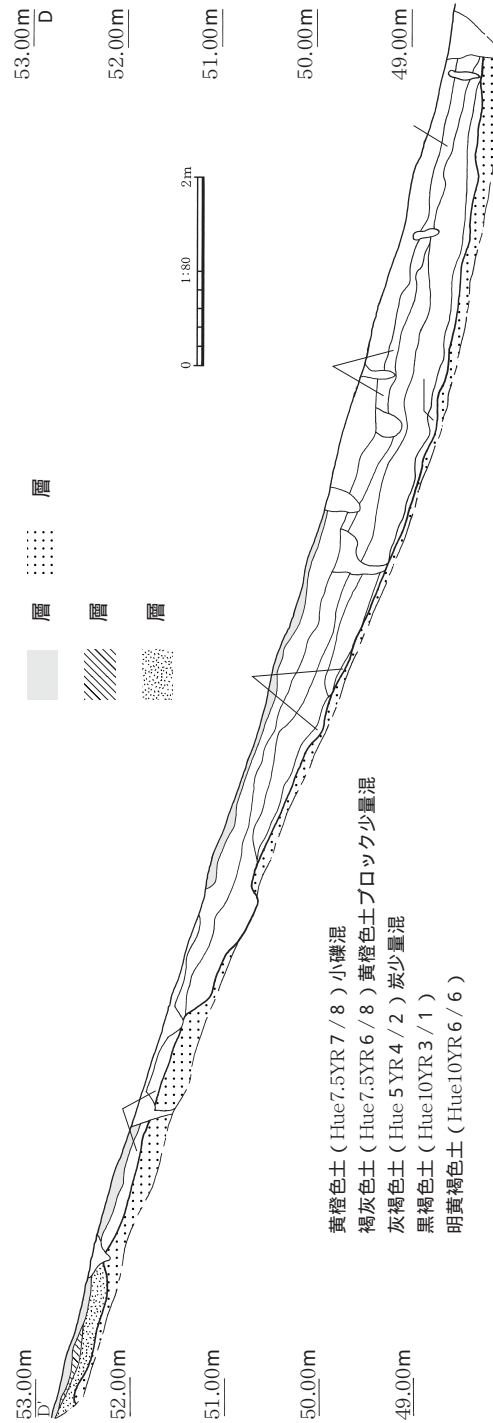


図6 調査地土層断面 (3)

(加藤)

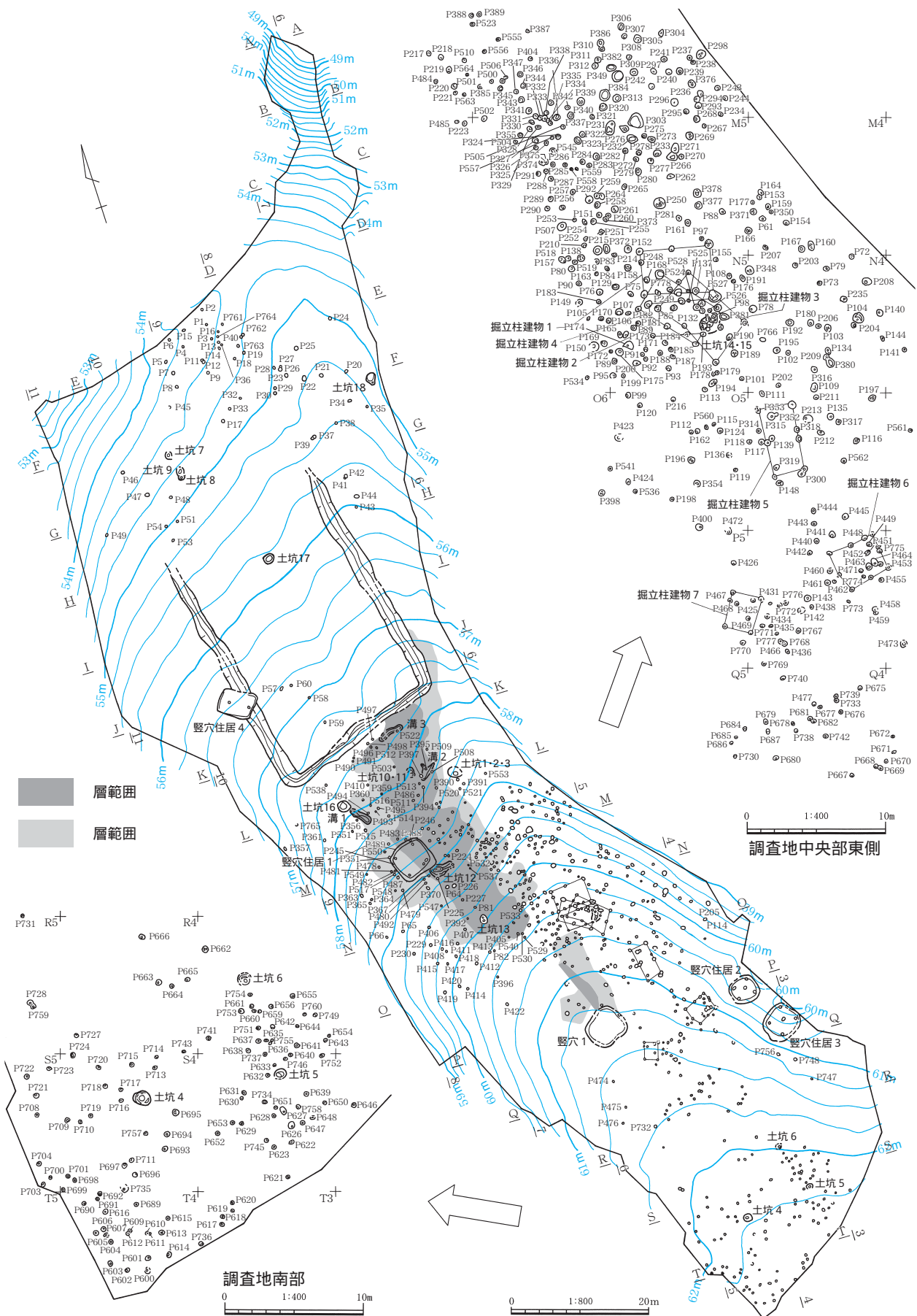


図7 調査地遺構配置

2. 縄文時代の遺構と遺物

本遺跡では表土・攪乱土中や包含層中より縄文土器片、黒曜石・安山岩製石器が出土しているが、当該期の遺構と想定できるのは土坑3基に留まる。

(加藤)

土坑1・2・3 (図7、8 図版8-1・2・3、14-5)

K6グリッドに位置しI層下のV層上面において検出した。3基の土坑が重複しており、土層断面での切り合い関係の観察から、古い方より1、2、3と呼称する。いずれも埋土中に縄文土器片を含み、特に土坑2の④・⑤層から多数出土した。土器は小片で磨耗が著しいが、胎土や焼成、施文された縄文の相違から少なくとも4個体分あると思われる。土坑2は検出面からの深さ約40cmを測り、しっかりと掘り込まれているが性格は不明である。土坑1～3出土土器は重複していることから、埋没の時期差は無いと思われ、概ね縄文時代中期と考えている。

(加藤)

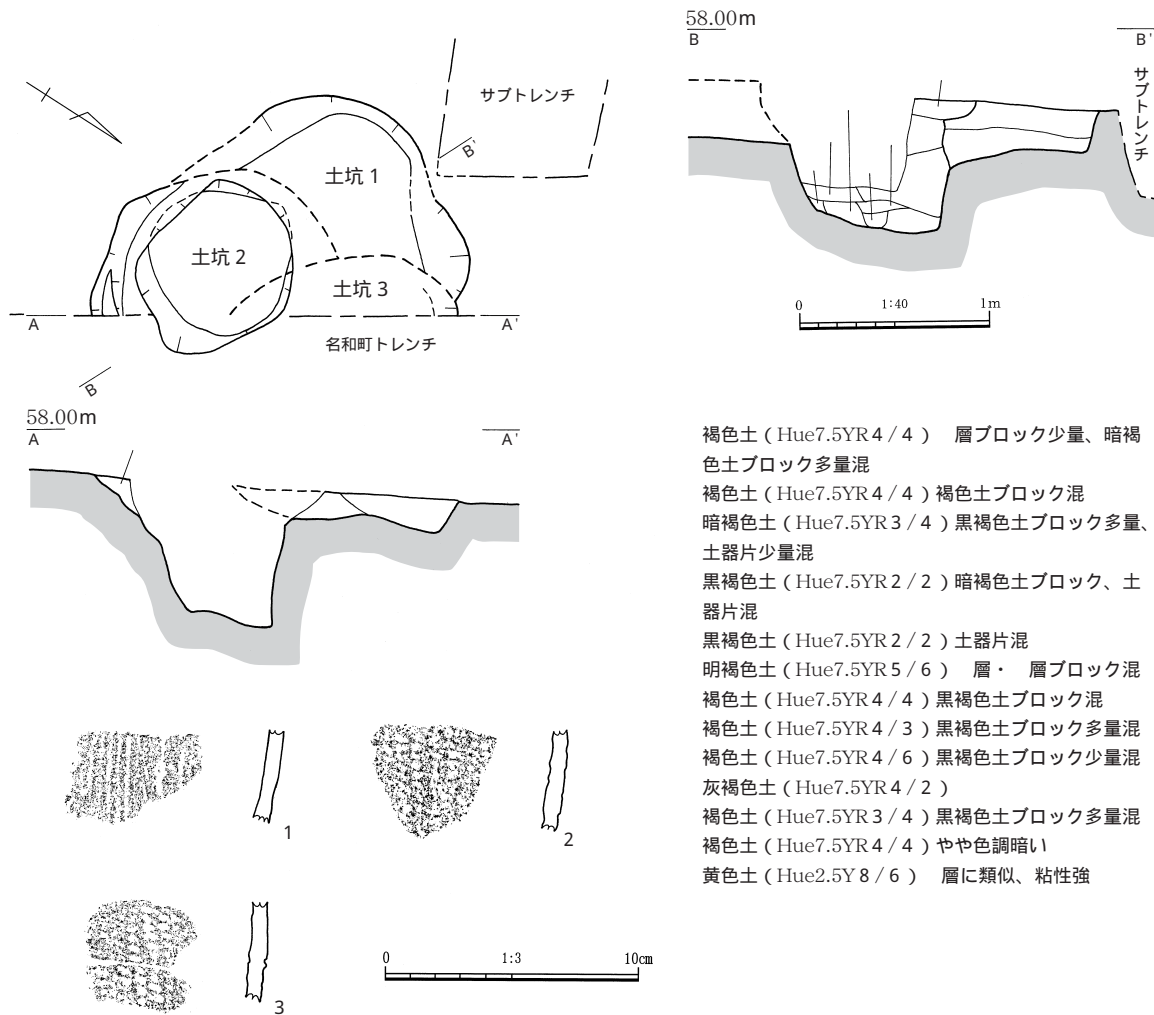


図8 土坑1・2・3および出土遺物

遺物番号	挿図番号	遺構位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
1	8	土坑2 不明	縄文	-	-	△3.7	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	細砂粒少量 良	橙色	
2	8	土坑2 不明	縄文	-	-	△4.1	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒少量 良	浅黄橙色	
3	8	土坑2 ⑤層	縄文	-	-	△4.0	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	浅黄橙色	

遺構外出土土器（図9 図版15-1）

遺構外で出土した土器のうち、特徴的なものを列挙した。小片が多く、磨耗が著しい資料もみられるが、本遺跡出土の縄文土器の時期は早期～中期に収まると考えている。4は山形の押型文が外面に施文される。黄島式併行の可能性ある。5は撚糸文が外面に施される。節が不明瞭で撚りが甘い。6も磨耗が進行しているが、外面に撚糸文を確認できる。5・6について時期比定は難しい。7は里木I式に類似しており、縄文時代前期後葉に属すると考えている。8～19は縄文時代中期と判断した。9・10は外面に貝殻腹縁による条痕と円形列点文が施される。船元I式A類。8・11～15も爪形文等の特徴から船元I式A類と思われる。16は地が縄文、貼付突帯上に刻目を施す。船元II式B類か。17

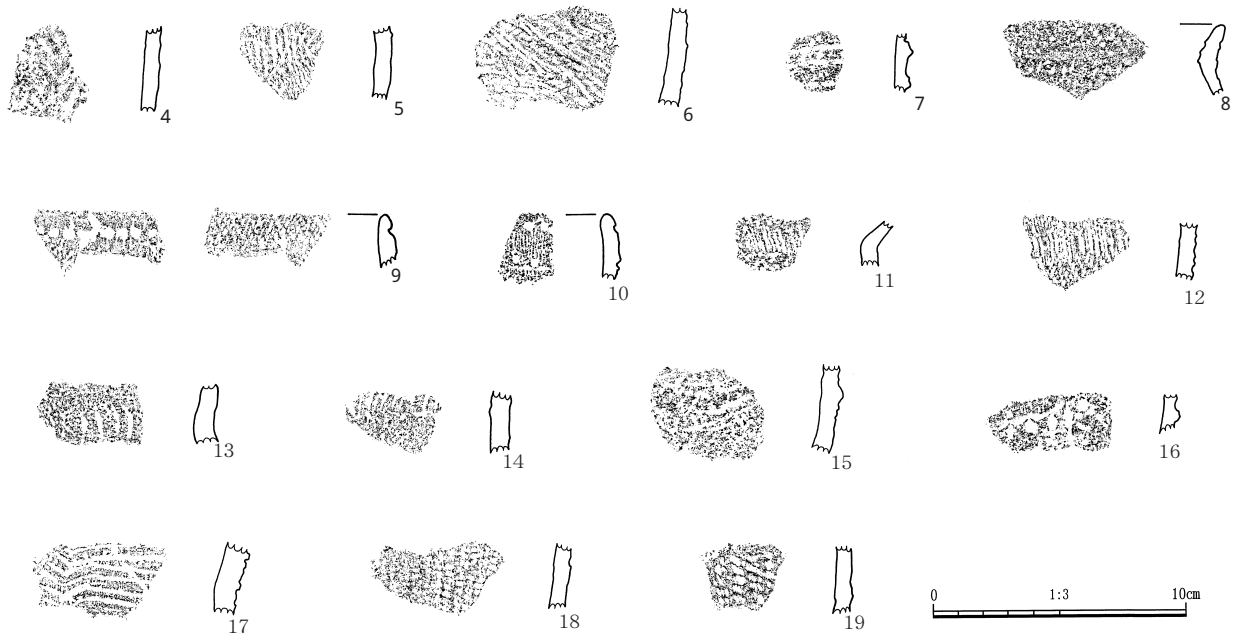


図9 遺構外出土土器

遺物番号	挿図番号	遺構層位	種別	器種	口径(cm) (底)	器高 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
4	9	R 2 V層上面	縄文	深鉢	-	△3.4	外面：押型文（山形文、横位方向） 内面：磨耗のため不明	細砂粒多量 良	外面：浅黄褐色 内面：灰黄褐色	山形の振幅大、 鋭角
5	9	M 6 III層上面	縄文	深鉢	-	△2.9	外面：撚糸文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	橙色	
6	9	L 7 表土下	縄文	深鉢	-	△3.9	外面：撚糸文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：褐灰色 内面：褐色	
7	9	H 8 表土下	縄文	深鉢	-	△2.3	外面：貼付突帯 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	橙色	
8	9	H 8 表土下	縄文	深鉢	-	△2.8	外面：口縁部下爪形文？ 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	にぶい黄褐色、 黒褐色	口縁部
9	9	調査地中央 表土下	縄文	深鉢	-	△2.1	外面：貝殻腹縁による条痕 円形列点文 内面：口縁部縄文	砂粒多量 良	にぶい黄褐色	口縁部
10	9	K 6 表土下	縄文	深鉢	-	△2.6	外面：貝殻腹縁による条痕 円形列点文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 不明	にぶい黄褐色	口縁部
11	9	J 9 表土下	縄文	深鉢	-	△1.8	外面：貝殻腹縁による条痕 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい褐色	胴部屈曲部
12	9	K 7 II層上面	縄文	深鉢	-	△2.3	外面：貝殻腹縁による条痕 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	橙色	
13	9	G 9 表土下	縄文	深鉢	-	△2.4	外面：爪形文 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい橙色、黒褐色	胴部屈曲部
14	9	F 6 表土下	縄文	深鉢	-	△2.5	外面：爪形文 内面：磨耗のため不明	砂粒少量 良	にぶい褐色	胴部屈曲部？
15	9	L 8 表土下	縄文	深鉢	-	△3.6	外面：細い貼付突帯、突帯上に刻み 磨耗著しい 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい橙色	
16	9	J 6 表土下	縄文	深鉢	-	△1.6	外面：貼付突帯、突帯上に刻目 縄文 内面：ナデ	砂粒少量 良	にぶい橙色	
17	9	G 10 表土下	縄文	深鉢	-	△2.8	外面：半裁竹管状工具による押し沈線 内面：ナデ	砂粒少量 良	にぶい橙色	
18	9	L 6 III層上面	縄文	深鉢	-	△2.6	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	外面：にぶい橙色 内面：にぶい褐色	
19	9	K 7 II層上面	縄文	深鉢	-	△2.7	外面：縄文 内面：磨耗のため不明	砂粒多量 良	にぶい褐色	

は半截竹管状工具による押し沈線が特徴的で、船元Ⅱ式C類に類似する。

(加藤)

※本遺跡出土の縄文土器について、鳥取県教育委員会事務局 久保穰二郎妻木晩田遺跡現地事務所長の助言を得た。

遺構外出土石器

(図10～16 図版15-3)

遺構外出土石器は表土や土壌化の進行した層からの出土が多く、層位的な検討が不十分だが、石材や器種など縄文時代石器の特徴を備えているものを本項で扱った。出土石器のうち、石錘、磨石、砥石等弥生時代以降出土する可能性がある石器群については本章「5. その他の遺構と遺物 遺構外出土石器」に掲載している。

本項で扱う石器類は石鏃、楔形石器、スクレイパー、加工痕・使用痕のある剥片、局部磨製石斧、石匙、石核、剥片、碎片、素材が認められる(図11)。総数は569点である。石材は黒曜石がほとんどを占め、552点を数える(約97%)。残り17点が安山岩製である。これらを器種別にみると、楔形石器が40点と多いのが目を引く。また、碎片が420点と全体の約74%を占めるのも特徴である。石核、

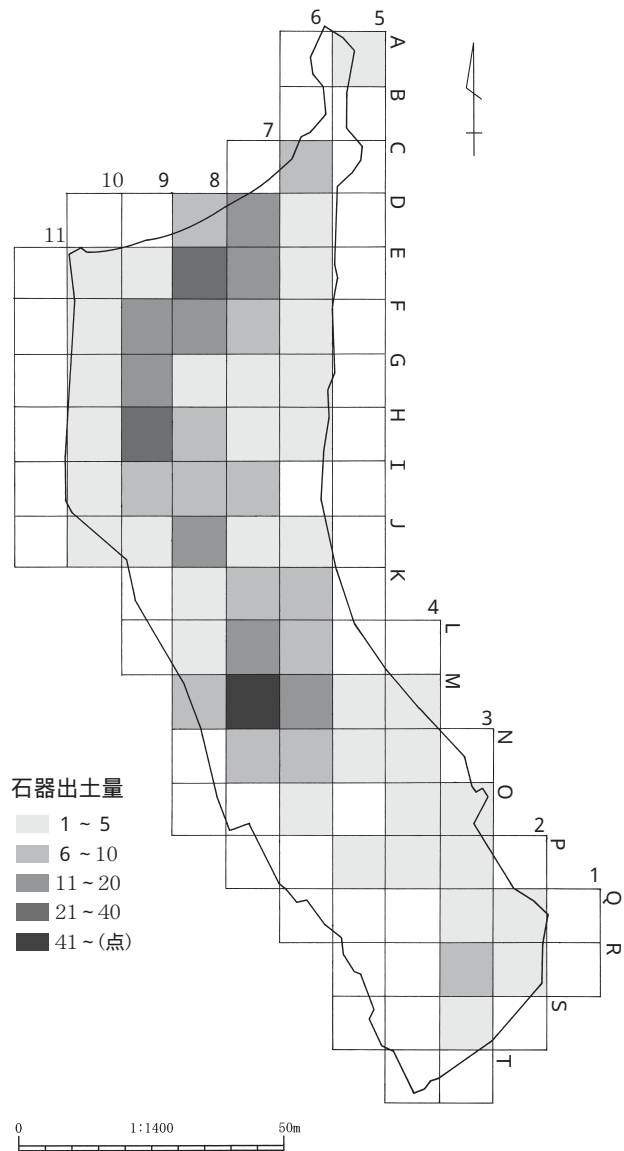


図10 グリッド別石器出土量概念図

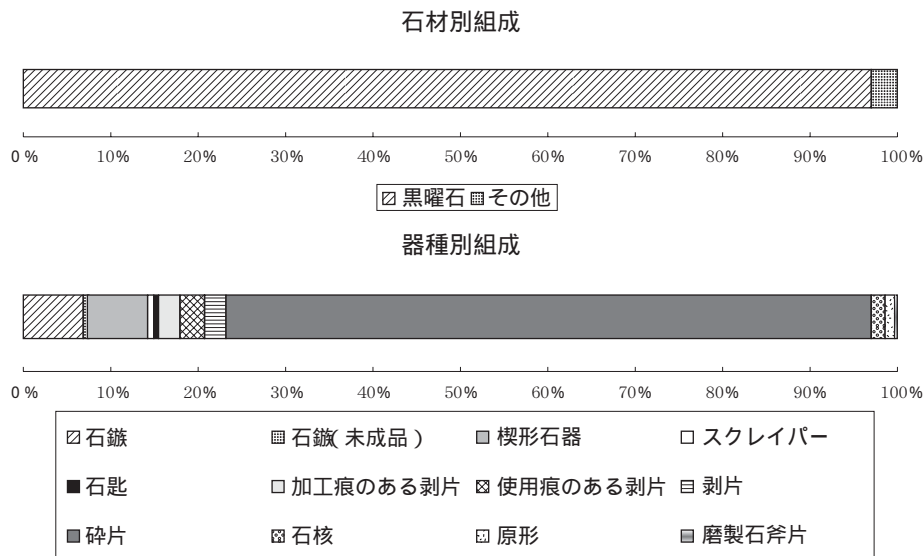


図11 石材および器種別組成図

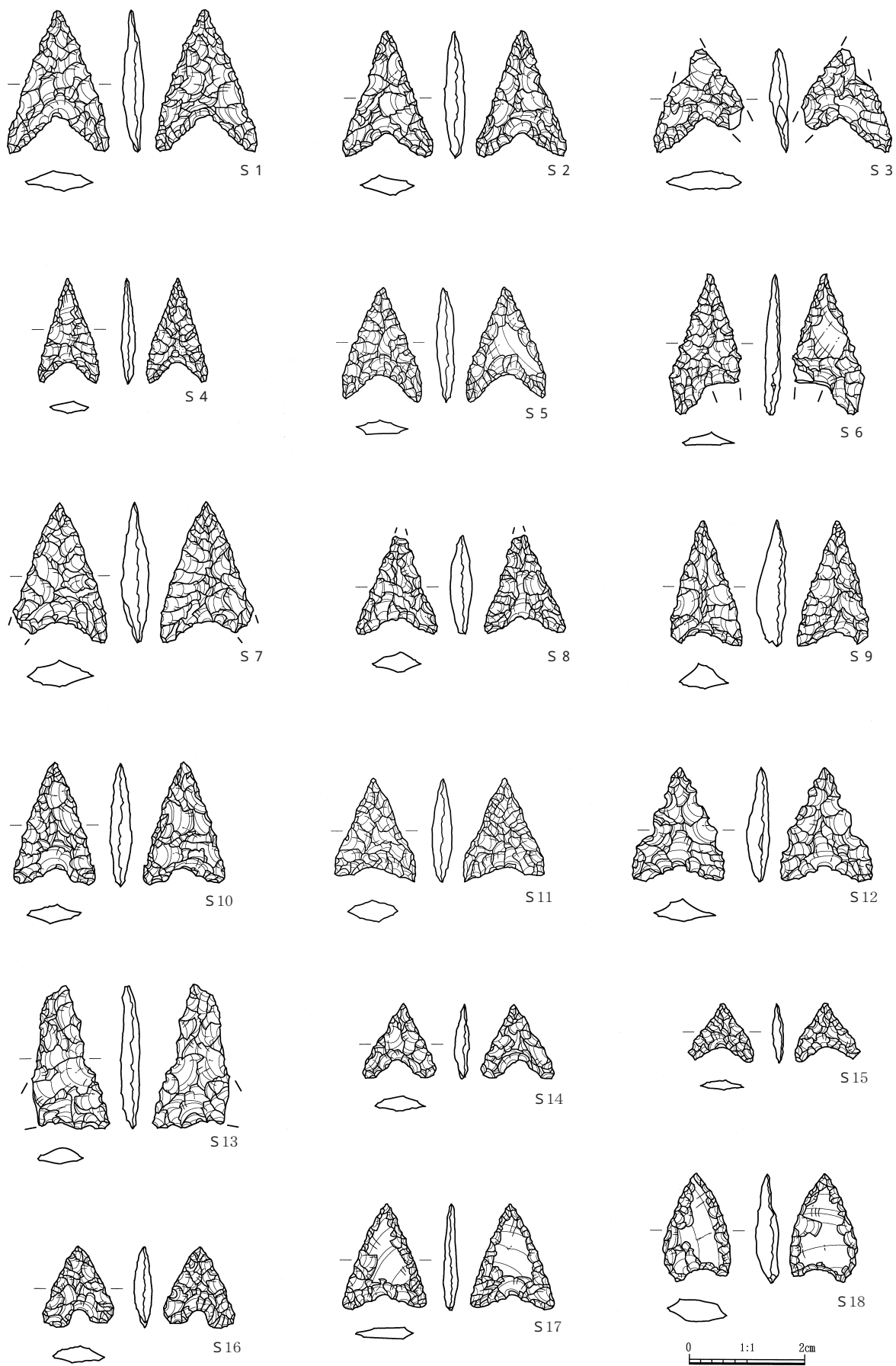


図12 石鏃（1）

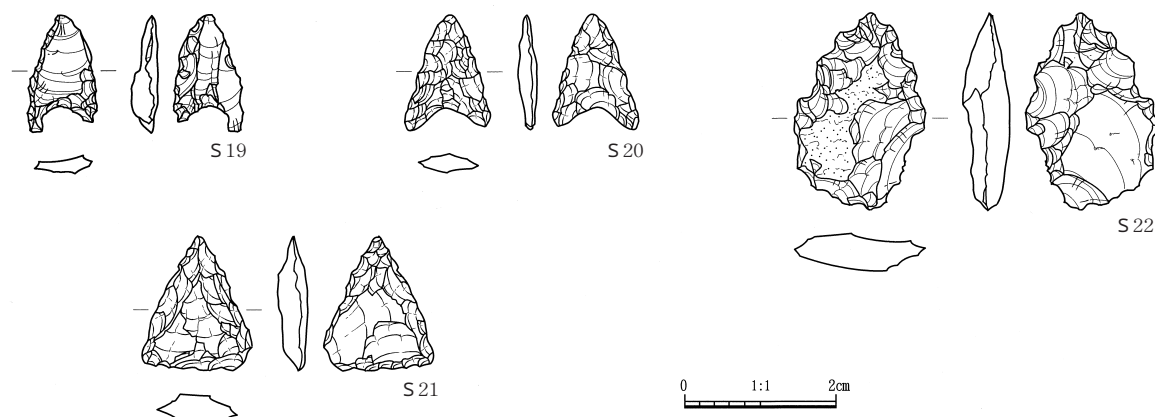


図13 石鏃（2）

遺物番号	挿図番号	地層区位	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S 1	12	I 9 表土下	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.4	0.5	
S 2	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	2.2	1.55	0.35	0.7	
S 3	12	F 8 表土下	石鏃	黒曜石	△1.8	△1.55	0.35	0.5	
S 4	12	F 8 不明	石鏃	黒曜石	1.85	1.05	0.25	0.2	
S 5	12	K 8 Ⅲ層上面	石鏃	黒曜石	2.0	1.35	0.3	0.4	
S 6	12	P 4 表土中	石鏃	黒曜石	2.45	△1.25	0.3	0.5	
S 7	12	I 10 V層上面	石鏃	黒曜石	2.45	1.6	0.5	1.1	
S 8	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	△1.7	1.45	0.4	0.5	
S 9	12	M 7 根攪乱土中	石鏃	黒曜石	2.2	1.25	0.5	0.8	
S 10	12	不明	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.7	
S 11	12	F 9 表土下	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
S 12	12	M 5 表土下	石鏃	黒曜石	2.0	1.6	0.4	0.7	
S 13	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	2.5	△1.35	0.35	0.8	
S 14	12	H 9 表土下	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.2	
S 15	12	H 9 表土下	石鏃	黒曜石	1.0	1.15	0.2	0.1	
S 16	12	不明	石鏃	黒曜石	1.4	1.25	0.3	0.3	
S 17	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	1.85	1.45	0.25	0.4	両面に素材剥離面残存
S 18	12	M 7 I層	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.4	0.7	両面に素材剥離面残存
S 19	13	J 7 V層上面	石鏃	黒曜石	1.55	0.9	0.35	0.3	両面に素材剥離面残存
S 20	13	H 9 表土下	石鏃	安山岩	1.5	1.1	0.25	0.3	
S 21	13	M 4 V層上面	石鏃	安山岩	1.8	1.45	0.4	0.8	平基無茎鏃
S 22	13	N 7 根攪乱土中	石鏃	黒曜石	2.6	1.7	0.6	2.1	未成品

剥片が一定数出土し、素材もわずかながら認められることから、当地で石器製作が行われていたことは明白である。

次に調査地内に設定したグリッド別（1グリッド：10m×10m）の石器出土量を算出した（図10）。M 7グリッドにおける78点（うち碎片62点）を筆頭に、E 8グリッドで35点（碎片28点）、H 9グリッドで24点（碎片17点）、F 8グリッドで20点（碎片18点）等、調査地中央～北半の数箇所に石器出土量の突出したグリッドがあり、その周辺グリッドにおいても一定の出土量がある様子が窺える。碎片

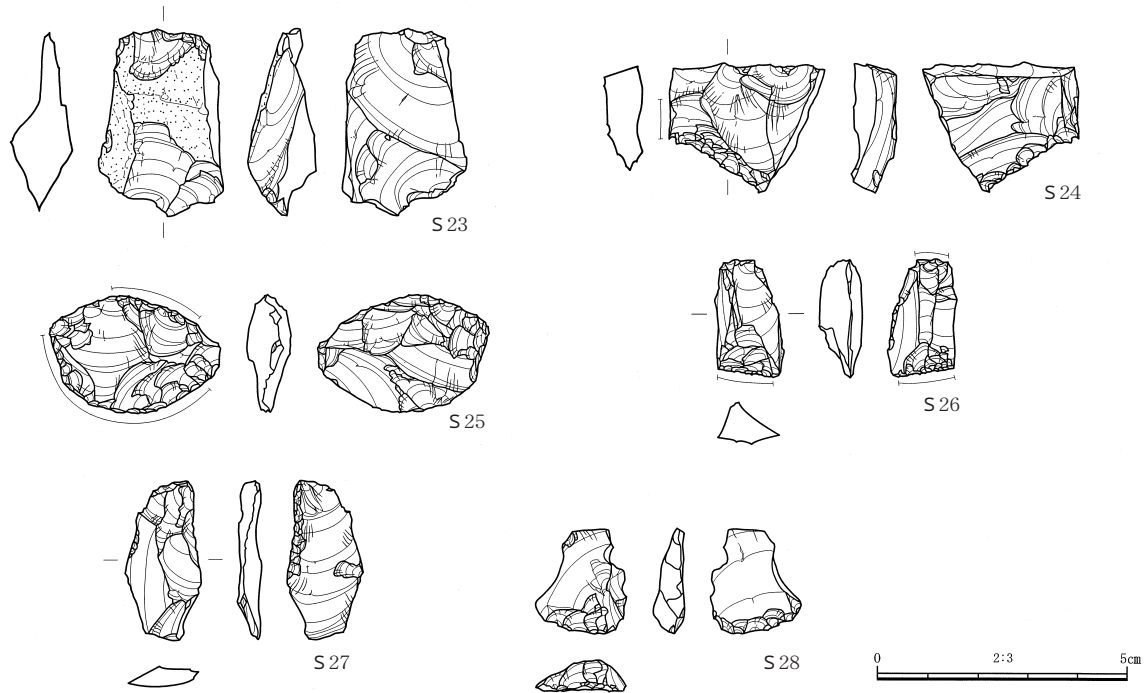


図14 楔形石器、スクレイパー

遺物番号	挿図番号	地 区 層 位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S23	14	不明	楔形石器	黒曜石	3.7	2.5	1.35	9.5	
S24	14	H 9 表土下	楔形石器	黒曜石	2.6	3.1	0.9	6.3	
S25	14	F 10 表土下	楔形石器	黒曜石	2.35	3.4	0.9	5.3	
S26	14	K 7 根攪乱土中	楔形石器	黒曜石	2.4	1.4	0.9	2.0	
S27	14	N 5 I層	スクレイパー	黒曜石	3.2	1.5	0.5	1.3	
S28	14	N 7 I層	スクレイパー	黒曜石	2.1	1.8	0.6	1.7	

の占める多さを考えれば石器製作跡を想定する上で重要であるが、上記グリッドにおいて当該期の関連遺構は検出されていない。また、本遺跡は傾斜地で根攪乱や土壌化が進み、土砂の流失が想定されるため、後世の資料移動に留意する必要がある。以下、器種別に概要を述べる。

石鏃は41点出土しており（未成品2点含む）、石材別に見ると黒曜石製38点、安山岩製3点である。このうち、22点を図示した（図12・13）。S1～20は基部に抉入を持つ凹基無茎鏃である。S1～6の抉入は比較的深めの逆V字形を呈する。S7～16は逆U字形で浅めの抉りを持つ。先端部－抉入部間が短く、ブーメラン形をしたもの（S14・15）がみられる。S17～19は両面に素材剥離面を残す。S20・21は安山岩製で、S21は平基無茎鏃である。S22は縁辺の一部に粗い調整がみられ、未成品とした。

楔形石器は40点出土し全て黒曜石製である。そのうち4点を図示した（図14 S23～26）。両極打法による剥離痕を有する広義の楔形石器が大半で、そのうち1点を図示した（S23）。S24～26は楔本来の機能を持つと思われるものである。

スクレイパーは黒曜石製のもの4点出土し、2点を図示した（図14、S27・28）。剥片縁辺に調整を施し、刃部をつくり出している。

石核は出土総数が9点を数える。石材はいずれも黒曜石で、6点を図示した（図15 S29～34）。

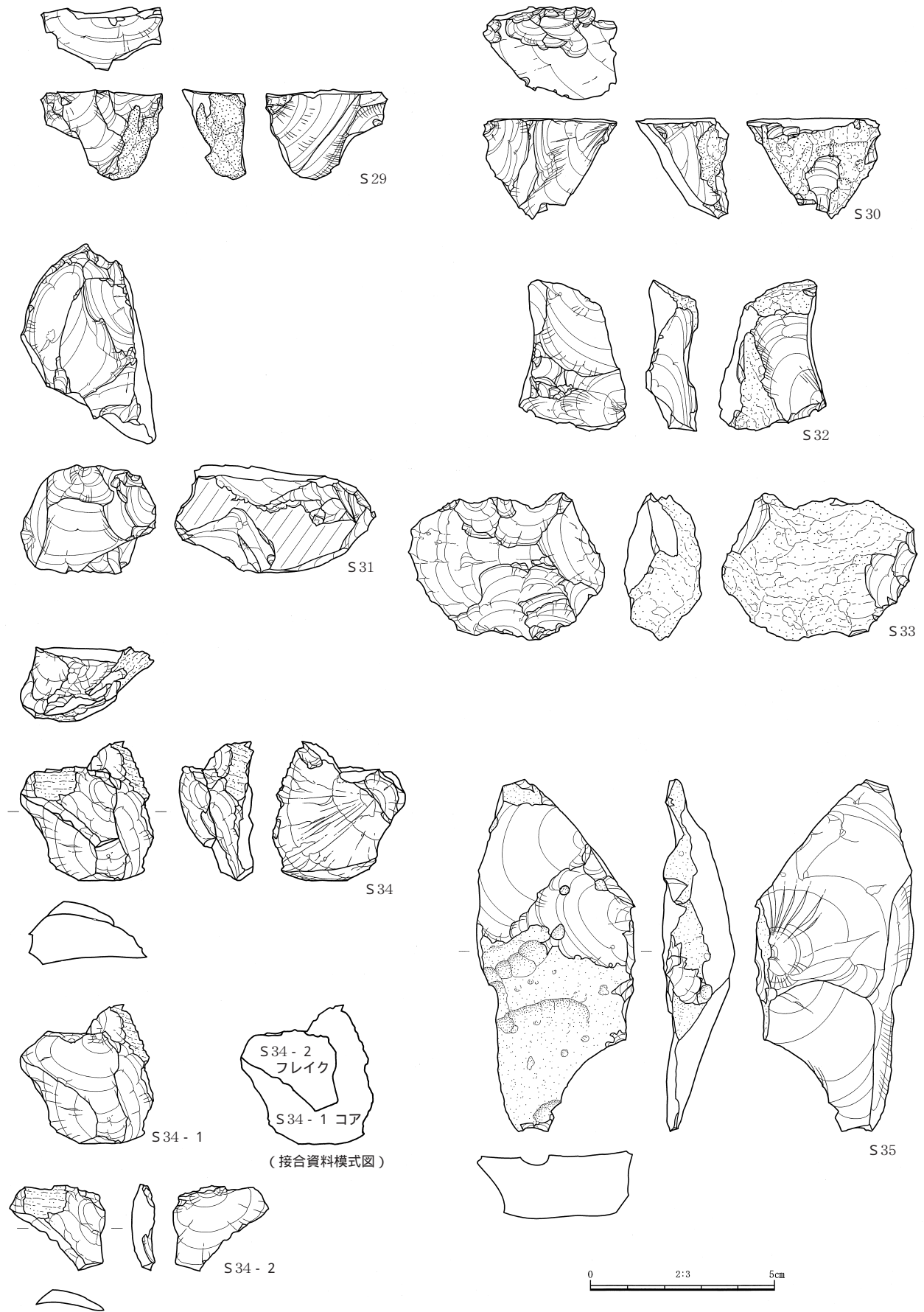


図15 石核、剥片

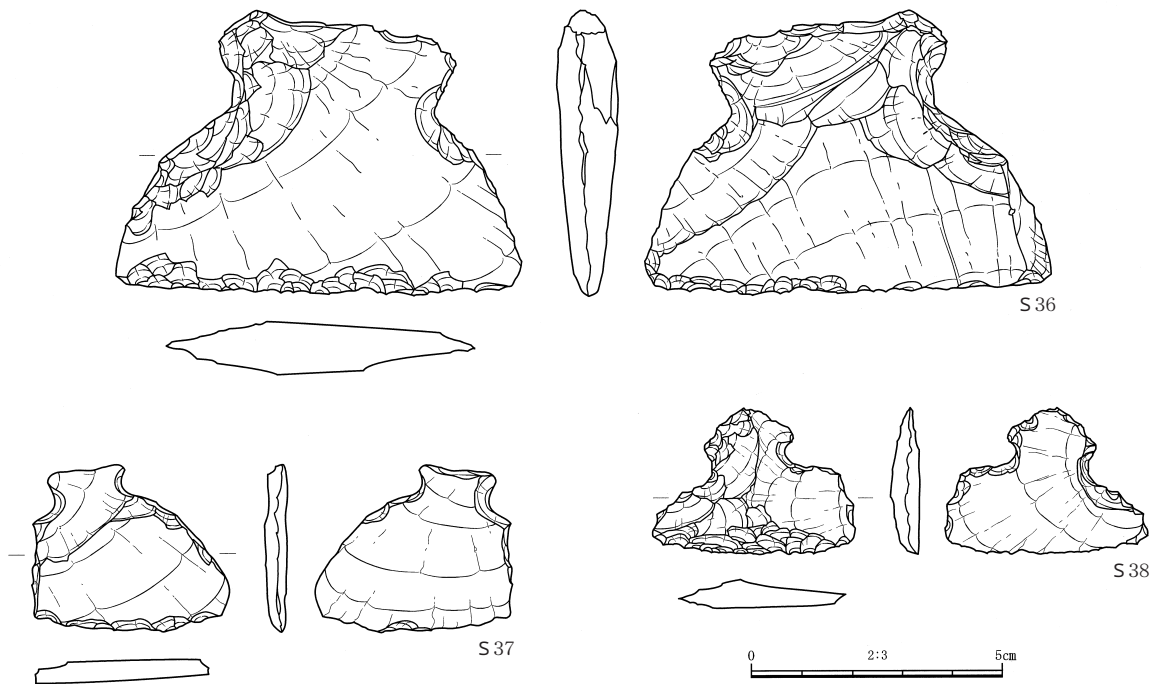


図16 石匙

遺物番号	挿図番号	地区位	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
S 29	15	調査地北側表土中	石核	黒曜石	2.4	3.25	1.7	8.7	
S 30	15	不明	石核	黒曜石	2.75	3.6	2.5	17.3	
S 31	15	M 7 表土中	石核	黒曜石	2.9	3.65	5.4	49.5	
S 32	15	N 7 II層上面	石核	黒曜石	4.1	2.9	1.4	14.6	
S 33	15	L 7 III層上面	石核	黒曜石	4.0	5.2	2.1	33.9	
S 34	15	M 7 I層	石核	黒曜石	3.8	3.6	2.0	17.3	接合資料 (コア+フレイク)
S 34-1					3.75	3.6	1.85	15.1	コア部
S 34-2					2.2	2.6	0.6	2.2	フレイク部
S 35	15	S 3 V層上面	剥片	黒曜石	4.3	9.5	1.95	60.0	
S 36	16	K 6 I層	石匙	安山岩	5.7	8.1	1.2	48.6	
S 37	16・35	K 7 溝 2 埋土中	石匙	安山岩	3.3	△3.9	0.5	6.4	
S 38	16	L 7 P 486埋土中	石匙	安山岩	2.9	4.05	0.6	0.4	

うち1点は接合資料である (S34)。いずれも不定形を呈する剥片を剥出している。原礫面の付着が大きく見られるものが多い。

S35は素材として利用しうる大型の剥片で、背面等に原礫面が大きく付着している。

S36~38は石匙で、3点出土した。S37・38は遺構からの出土であるがこの項に記載した。いずれも横型で、S36・37は平面形が三角形状を呈する。S36は両面加撃により刃部を作り出し、S37・38は片面加撃によるものである。

(加藤)